

教員養成における学校現場研修の取り組み

三木 伸吾

1. はじめに

平成 25 年 2 月から、島根県大田市教育委員会及び同市内中学校協力のもと、中・高等学校保健体育科の教員を志望する学生を対象に、学校現場で授業実践を含めた宿泊研修を全 3 回（平成 25 年 2 月・平成 25 年 9 月・平成 26 年 2 月）実施してきた¹。研修には毎回約 20 名の学生が参加し、事前準備及び授業・教材研究を通して、概ね意欲的な態度で研修に取り組んでいるといえる。しかし、実際の学校現場研修では、生徒・学校現場の実態を前に、学生自身が思い描いていた指導ができないことや事前に準備していたことが予定通りに遂行できずに適切な対応が取れない場面

が多くあった。そのため、これまで全 3 回の研修では、研修を通して浮き彫りとなった学生の課題や実態に応じて、その内容や目的の修正を試みてきた。

2. 研修前の学生の志望動機と教育観

平成 24 年 11 月から実施している教員採用試験対策勉強会²に参加している学生 11 名（本研修に参加した学生 8 名を含む）を対象に、教員の志望動機と教育観に関する調査を実施した。研修前の学生の実態を把握し本研修の企画に反映する目的で実施したもので、18 項目の質問（自由記述）とその回答に対する自己評価による 5 段階の明確さを調査した（表 1）。

No.1 教師を目指すきっかけやエピソード	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.2 なぜその県（市・地区）なのか	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.3 なぜ中学校（高等学校なのか）なのか	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.4 なぜ保健体育科なのか	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.5 教師という職業の魅力	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.6 教師という職業への不安とその対策	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.7 目指す教師像	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.8 県（市・地区）の教育活動に貢献できること	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.9 学校運営や学校の教育活動に貢献できること	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.10 学年運営や学年の教育活動に貢献できること	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.11 学級運営の目標	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.12 保健体育科教育・保健体育科授業運営の目標	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.13 道徳教育の目標	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.14 保護者、地域との関わり方への目標	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.15 生徒指導の目標	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.16 進路指導の目標	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.17 生活指導の目標	【（明確さ） 5・4・3・2・1】
No.18 部活動運営の目標	【（明確さ） 5・4・3・2・1】

表 1 学生の教職への志望動機と教育観に関する調査項目

¹ 研修日程や活動内容についての詳細は大大谷大学教職教育センター紀要第 5 号及び大阪大谷大学志学 45 号に掲載予定である。

² 本学部の教員志望の学生が中心となって毎月 2 回のペースで開催している勉強会である。大阪大谷大学教職教育センター紀要第 4 号「保健体育教員養成課程に関する課題と展望」に詳細が記してある。

記述の明確性を示す指標として設けた、5 段階の明確さの各項目の合計は以下のようになつた (表 2)。

学生	学年	教師を目指すきっかけやエピソード	なぜその県(市・地区)なのか	なぜ中学校(高等学校なのか)なのか	なぜ保健体育科なのか	教師という職業の魅力	教師という職業への不安とその対策	目指す教師像	県(市・地区)の教育活動に貢献できること	学校運営や学校の教育活動に貢献できること	学年運営や学年の教育活動に貢献できること	学級運営の目標	保健体育科教育・保健体育科授業運営の目標	道徳教育の目標	身体着、地域との関わり方への目標	生徒指導の目標	進路指導の目標	生活指導の目標	部活動運営の目標
		No.1志望動機	No.2地域理由	No.3校種理由	No.4教科理由	No.5職種の魅力	No.6不安と対策	No.7目標像	No.8地域貢献	No.9学校貢献	No.10学年貢献	No.11学級目標	No.12教科目標	No.13道徳目標	No.14地域・保護者	No.15生徒指導	No.16進路指導	No.17生活指導	No.18部活動
A	1	2	3	3	2	3	3	3	1	1	2	3	4	2	2	1	1	2	2
B	2	3	2	3	3	3	1	2	3	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1
C	2	4	4	2	3	3	3	2	1	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
D	2	5	3	2	1	2	3	5	1	1	1	5	1	5	1	1	1	1	5
E	3	4	1	3	4	4	1	3	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	4
F	3	1	1	1	1	2	1	3	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	3
G	3	4	4	5	3	5	5	4	1	1	1	1	3	1	2	2	3	1	3
H	3	4	2	1	3	3	1	4	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	4
I	3	2	5	4	4	3	3	3	1	1	1	2	3	3	3	3	2	2	2
J	3	4	1	4	1	3	4	4	1	4	1	3	1	1	1	1	4	1	5
K	3	3	1	1	1	2	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3
合計		36	27	29	26	33	27	36	13	19	12	23	19	18	15	15	17	13	33
		65%	49%	53%	47%	60%	49%	65%	24%	35%	22%	42%	35%	33%	27%	27%	31%	24%	60%
未記入		1	3	3	3	0	4	0	10	5	10	5	7	8	7	7	7	8	1
1		1	4	3	4	0	4	0	10	8	10	5	7	8	8	8	8	9	2
2		2	2	2	1	3	1	2	0	0	1	2	1	1	2	2	1	2	2
3		2	2	3	4	6	4	5	1	1	0	3	2	1	1	1	1	0	3
4		5	2	2	2	1	1	3	0	2	0	0	1	0	0	0	1	0	2
5		1	1	1	0	1	1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2

表 2 質問項目に対する回答の明確さ

質問項目 No.1,5,7に関する志望動機やその理由、また、No.18 の部活動運営に関して、ほとんどの学生が回答することができ明確に答えられている。一方で、学校・学年運営や地域・保護者との関わり方、道徳指導、生徒指導、進路指導など学校の多岐にわたる校務に関する質問項目では明確性も低く未回答が目立った。No.1 の教師を目指すきっかけやエピソードでは、大学入学までの学校期に出会ってきた特定の教員に対する憧れであることが多く、特に体育担当か部活動顧問に影響を受けたエピソードがほとんどであった。また、No.4 の担当教科の志望動機では「体育・スポーツが得意である」、No.5 の教職の魅力では「生徒の成長が身近で見ることができる」、No.7 の目指す教師像では「信頼される教師」という回答が多く見られた。

本調査から、学生の多くが体育分野及び運動部活動の指導にその志望動機あり、現時点では学校の教職員が担う職務内容やそれに対する目標が明確でないことが明らかになった。当然のことであるが、学生がこれまで経験してきた学校現場とは、児童・生徒の視点からのものであり、学校運営に携わる学校教職員としての視点は大学で受講する講義上の知識が頼りとなる。そのため、本研修では体育科の授業実践に留まらず、多角的な視点から現場を経験することを目的に研修を進めていくことを目指した。

3. 平成 25 年 2 月研修 (第 1 回目)

2013 年 2 月 20 日～22 日の 2 泊 3 日に実施した。学生は全 20 名 (4 回生男子 1 名・3 回生男子 5 名、女子 4 名・2 回生男子 4 名、

女子6名)の参加であった。本研修では、当時の時点で学生が持つ教職への志望動機のほとんどが、部活動指導・体育実技指導(特に自分が専門として行ってきた種目)のスポーツ教育に取り組みたいという志望理由に偏っていたことから、学校教育の総論を基盤にした教科指導の在り方を主題においた。

特に、研修校では校長主導のもと道徳教育と教科の関連を図る教育活動を推進しており、体育科教育が単なる体育の指導やスポーツ教育に偏重するのではなく、教科を通じて学校の教育目標を達成していく視点が学びの対象となった(表2、表3)。

講義①	「現場で求められる教員像」
大田市立第一中学校校長 秋風光規先生	教員としての実践力とは何か。人間教育、道徳教育を前提とする教員の在り方について。現代における教育諸問題といま現場で求められている教師の資質や能力について。保健体育科の教員に求められる学校での役割。学生時代に身につけておくべき教師としての素養をアドバイスして頂く。
講義②	「教師という職業の魅力」
大田市立第一中学校教務主任 今口秀明先生	地域や時代の違い・実態と教育について。可変的なものから共通するものまで、先生の経験談。そこから見えてくる教師という職業の本質的な魅力を伝えて頂く。また、部活動運営についての指導実践を紹介して頂く。
講義③	「中学校体育に求められる授業実践力」
大田市立第三中学校校長 安藤賢一先生	中学校、高等学校における保健体育科では、全国的にみてもその授業実践例や授業法などの研究・共有化が盛んではない。授業実践力の向上には、積極的な授業改善に対する取り組みが必要である。現場の研究実践をどのように進めてこられたか、また、その重要性を伝えて頂く。

表3 第1回目学校現場研修の講義内容

学校研修①	・研修校へのあいさつ ・学校、生徒の実態について・校長講話
学校研修②	・授業研修(道徳) 授業視察 ・研究協議 ・質疑
授業実践①	・昼休みポスター授業 健康をテーマに、学生が昼休みにミニ講座を行う
学校研修③	・授業研修(体育) ・研究協議 ・総括
授業実践②	・授業実践(体育) 体育分野「球技バスケットボール」について系統的な練習からルールやチーム構成の工夫を用いたゲームまでを展開する。
学校研修④	・授業研修(保健) ・研究協議 ・総括
授業実践③	・授業実践(保健) 保健分野「応急手当の意義と手順」傷害による応急手当をテーマに、T1(主教員役)の先生の授業に各班に入る(サポートティチャー)学生6名として参加させてもらう

表4 第1回目学校現場研修の学校研修と授業実践内容

以下は、第1回目の研修を通じた学生 の振り返りレポートの抜粋である(表5)。

○なぜ、体育教員を目指そうと思いだめたのか。それは、高校の時の顧問の先生に憧れたからである。体育教師になり、部活の顧問になって指導したいと思っていた。しかし、校長先生がおっしゃった、教員になりどうしていききたいのか。また、目標はなんなのか。この言葉に僕は、「確かに、なりたいただけ」で目標などなかった。改めて自分がなぜ体育教師になりたいのか。正直、今は答えがでないのこれからこの答えを出していきたいと思う。

○学校教育は「知識・理解・技能」＝「わかる・できる・覚える」を身につけるところであり、人生の生きるための自分の道具づくりである。(教科教育)しかし、最も大切なことはその道具を「いつ・どこで・どういう風に」使うかということであり、「感性・共感性・センス・判断力など」を生徒に身につけさせる必要があると感じた。

○「教師になりたいから」という答えでは教師になってしまうとそこで夢は終わってしまう。本当の答えとしては、教員になって何をするのか、またどうするのかという志が大切である。

○自分が教師を目指すきっかけになったのは、高校時の教師が楽に見えたことである。しかし、これは大きな間違いであると実習を通して理解した。教師という職業は非常に大変であり、人を相手にするため大きな責任感もある。そのため、生半可な気持ちでは務まらない仕事である。しかし、そんな大変な仕事であるが、そこにやりがいというものもある。

○指導案に縛られすぎて視野が狭くなり、周り全体を見ることが出来なくなってしまっていたことだ。いざ、現場にいくと、こういった計画通りに行えないことも必ず出てくる。そういった時の臨機応変な行動や指示も我々に求められる能力だと改めて考えさせられ、まだまだ経験の浅さを痛感しました。

○授業中に起こりうるイレギュラーへの対応を全く予測もしていなかった。そのイレギュラーにその場で対応するだけの応用力も僕たちにはありませんでした。1つ例をあげると、ある女子生徒が人工呼吸を嫌がったという事がありました。少し考えていけば、中学生で思春期の子供たちならそういったこともありうることぐらい簡単に想像がつかます。その場で対応できるだけの知識と応用力もありませんでした。

表5 第1回目参加学生の振り返りより (一部抜粋)

この研修では、4回生の男子1名を除き、全員が教師としての立場である「教える側」の視点をもって学校現場に入ることが初めてであった。レポートの抜粋にもあるように、ほとんどの学生が学校教育に求められる「人間教育」の前提に立った指導のあり方を実感し教育についての価値の幅を広げることができた。また、実際に生徒を指導する場面では、限られた時間内に多くの生徒を一斉に指導すること(授業展開)と生徒の実態に応じて適切に判断し手立てをとっていくこと(個別指導)に難しさを覚える学生が多くいた。しかし、この実践的な経験を通して、より具体的な課題や学校現場で求められる指導力の本質に迫ることができたといえる。このことから、

現場実習がはじめてに近い学生にとっては「学校現場を経験する」ことが研修の大きな意義となったようである。

4. 平成25年9月研修(第2回目)

第1回目の研修を通して、宿泊を伴った集中的な現場研修の必要性が明確となった。さらに、参加学生からは、「より具体的なテーマをもって研修を実施したい」との申し入れがあった。そのため、第1回目の研修に参加した現3回生(当時2回生)のなかから学生5名が代表を務め、本学志学会学生企画研究助成事業に研究計画書を提出し、同事業助成のもと2013年9月10日～14日の4泊5日に実施することになった。本企画では、代表学

生が立案・企画の中心となって、前回得た問題意識を整理・検討し、より具体的なねらい「現場で求められる指導力とは何か」というテーマをもって学校現場研修を実施することを目指した。今回の企画では全23名（4回生男子4名・3回生男子14名、女子5名）の学生が参加した。そのうち、第1回目から2回続けての参加者が11名であった。また、第1

回目の企画において、地域間交流としての意義や大田市周辺に大学が無いことから生徒に有意義な教育的価値が認められるとして教育委員会、中学校から一定の評価が得られた。そのため、本企画の実施地の選定としては、本学保健体育科教育研究の実践研究の継続に協力体制がある第1回目と同じ学校に依頼した（表6、表7）。

講義①	「現場で求められる教員像」
大田市立第一中学校校長 秋風光規先生	教員としての実践力とは何か。人間教育、道徳教育を前提とする教員の在り方について。現代における教育諸問題といま現場で求められている教師の資質や能力について。保健体育科の教員に求められる学校での役割。学生時代に身につけておくべき教師としての素養をアドバイスして頂く。
講義②	「未成年の性的接触について・発達障害について」
大田市立病院 産婦人科上席部長 医学博士 榎原研先生	医療（特に産婦人科医）の立場から、未成年の問題、教育の問題についてご講義して頂く。特に、「現代の子供たちの性の実態」と「発達障害とその指導」について数多くの子供たちと関わってきた榎原先生の貴重なお話を頂く。
講義③	「体育実技で求められる指導力とは」
大田市教育委員会 矢田 悦夫先生	体育実技で求められる指導力について、矢田先生のご指導実践における経験的立場から解説して頂く、また、今回の研修のテーマである「現場で求められる指導力とは何か」について具体的な質問に答えて頂き、アドバイスをさせていただく時間としたい。

表6 第2回目学校現場研修の講義内容

学校研修①	・研修校へのあいさつ ・学校、生徒の実態について（教務主任）・校長講話
授業実践①	・授業実践（道徳・総合的な学習の時間） 道徳教育の実態や教育現場における道徳教育の重要性などを考える 第2学年の生徒と交流し、「仲間を思いやる」とはどういうことかについて一緒に考える
授業実践②	・授業実践（体育） 体育分野「ジャベリックスロー」について系統的な練習から簡易的な記録会までを展開する
授業実践③	・授業実践（保健） 保健分野「応急手当の意義と手順」より水難救助をテーマに、心肺蘇生法の手順をT1（主教員役）の先生の授業に各班に入る（サポートティチャー）学生6名として参加させてもらう

表7 第2回目学校現場研修の学校研修と授業実践内容

第1回目の研修から、生徒の実態に応じた指導のあり方やそこで求められる指導力について課題が生じた。学生が掲げた「現場で求められる指導力とはなにか」というテーマに即して、講義の内容も生徒理解と授業実践力に焦点化させた内容を取り上げることにした。また、授業実践も生徒との関わりがより持てるように、体育授業では同じクラスを2回担当させてもらえるようにした。また、生徒理

解を深める実践力を養う目的として修学旅行まえの学年指導を総合的な学習の時間を通して集団指導を行った。

2回目の参加学生は、より具体的な視点をもって研修に臨んだため、振り返りの内容も観点の整理された明確なものへと変容している。以下は、事後に行った「現場で求められる指導力とは何か」をテーマにしたレポートの抜粋（2回目の参加者を抽出）である（表8）。

○子どもたちにわかるような学習指導を行う力と、生徒指導を行う力であると考え。そして、その学習指導と生徒指導をよりよいものにするために、生徒を理解するということが求められると考える。それは、生徒理解を深めることによって生徒の特性や実態を知ることができ、ひとりひとりに合った指導ができるからである。

○「全ての子どもを対象にする指導力」であると感じました。実際に大田一中の生徒たち、専門家の方々の講義を受講し、たくさんの個性をもった生徒たちがいることを知りました。実際に合宿で私自身生徒たちに指導してみて、指導するという事は非常に難しく上手いかなことばかりでした。でも「個性が強い生徒がいて上手くできない」ということは言い訳にならず、指導者は、学習指導要領に沿った学習を指導しなければいけないので、現場に求められる指導力は、「全ての子どもを対象にする」ことであると感じました。

○1つ目は、学習意欲を促す力である。…実際現場に出ると毎回上手くいくとは限らない。そういう状況の時こそいかに生徒たちの学習意欲を引き出すかがキーポイントだと感じたのだ。2つ目は、想像力である。授業をする時、生徒の人数は普段授業をする生徒の何倍も多い人数であった。授業をしている中で起ったことは、欠席者が出て列が崩れる、…といった想定外のことであった。このようなことから、事前に多少はズレが生じることを想像することや、生徒が当日どのような動きをするかなど想像できたはずである。3つ目は、心を引きつける授業である。いくら想像力があっても、学習意欲を促す力があっても授業内容がしっかりしていないと意味をなさないと思ったのだ。私が授業をした感想から言うと、ただ生徒に教え込んだだけということで実技とはいえど一方通行な授業だったと言える。そうではなくて、生徒参加型の授業で生徒たちに問いを投げかけて一緒に考えながら授業をしていくことが大事だと思ったのだ。

○私が現場で求められる指導力として、大きく分けて①柔軟性②瞬時の対応力③傾聴力④考えさせる力の四つが必要であると考えた。…一つの授業に対して指導案を作り、その指導案に沿って授業を進めていくが、授業時間にきっちり終わらせるのも教師力であり、何らかの理由で時間が足りないとき指導案の内容をそのままするのではなく、瞬時の対応力で変更していくことが必要だと感じたのである。そして傾聴力とは島根の合宿の際に、生徒の中に上手くコミュニケーションを取れず、大学生に対して傷つくことを言う聞き、どんな子かと思っていたが、実際に話をし、相手の言葉に耳を傾けると、とても素直な子だと感じた。このことから、一人一人の子どもの良さを、多様な能力を理解するためにも傾聴力は現場の中で欠かせないものだと感じた。最後に考えさせる力は、総合の時間を通して教師という立場上教えることがメインであると考えていたが、実際には生徒が主体となる授業展開をし、自分自身で考えるという時間が子供たちにとって、とても大切なことだと改めて考えさせられた。

表8 第2回目参加学生の振り返りより（一部抜粋）

この振り返りからもわかるように、第1回目の研修を通して学んだ「学校現場を経験する」ことを通して学んだ学校教育全般を前提として、より実践的な視点を持って研修に臨めたと評価できる。一方で、第1回目の研修と同様に、生徒とのやり取りに困惑する場面が見られた。あらかじめ、指導案を作成し教材研究を重ねて臨んだ授業であっても、生徒の反応が意図したものと異なった時の対応に難しさを感じるなどの感想が多かったのである。さらに、本研修は研究助成事業であったため、一定の結論をもって研修発表会を行った。そのため、研修後も事後研究会を開催し、「現場で求められる指導力とは何か」に対する以下の結論を出した。

① 教科の専門性

- ・綿密な教材研究を行い、保健体育科の専門性を高める
- ・アウトプットを前提としたインプットをする（大学の講義を大切にす）

② コミュニケーション能力（生徒を理解する力）

- ・他学部、他大学、教職員の先生方などと積極的に接し、多様な価値観を知る
- ・多様な経験を積み、生徒との会話の引き出しを増やしておく
- ・学校支援ボランティアなど、学校現場と関わる機会を多く設ける
- ・大勢の前に出て話をする機会を増やす

③ 瞬時の対応力

- ・学校現場と関わる機会を多く設け、学校で起こりうる事柄について少しでも多く知

っておく

- ・様々な場面で、予想外を想定した冷静で適切な対応ができるようにする

このような、結論を基に2013年12月12日に研修報告会を実施した。

5. 平成23年2月研修（第3回目）

第3回目の研修を2014年2月13日～16日の3泊4日実施した。学生は全22名（4回生男子4名、女子2名・3回生男子4名、女子3名・2回生男子6名、女子2名・1回生男子1名）の参加予定である。そのうち、第1回目から3回続けて参加している学生7名、第2回目からの2回続けての参加者が3名、第1回目及び第3回目の2回参加の学生が2名であった。

第1回目及び第2回目の研修では、授業担当を割り振り、大学生一人が生徒5～6人グループを担当する（一クラス36名に対して大学生が6人で指導する）形態をとった。これまでの研修を通して、2回以上の参加学生が12名いることから、より教育実習や日常の授業形態に近づけていくことを目指した（表10）。また、第2回目で実施された「総合的な学習の時間」で第2学年の「集団づくり」をテーマに授業実践を行った。その時の生徒たちの変化や学びの成果が認められたこともあり、学年主任からの提案で、その教育活動の延長として合同の宿泊研修を行うことになった（表11）。

今回の研修では、「学校現場を経験する」「より具体的なテーマをもって研修を行う」から、現実的な教育現場を経験するための授業実践を行った。全8回の事前準備を行い、教案作成を教育実習経験のある4回生を中心として

グループで作成した。あらかじめ、現場の授業担当教員から実施学級の生徒観を頂き、授業案検討会を重ねた。同時に、授業評価の観点を授業案に沿った形で作成した。この検討

を重ねた授業案を基に、2 学級同時進行で体育、保健の授業実践を各 1 人の授業者で実践することを試みたのである。

開講式・講義1	「学校の実態」「現場で求められる教員像（教師のカンを考える）」
大田市立第一中学校校長 秋風光規先生	教員としての実践力とは何か。人間教育、道徳教育を前提とする教員の在り方について。現代における教育諸問題といま現場で求められている教師の資質や能力について。保健体育科の教員に求められる学校での役割。学生時代に身につけておくべき教師としての素養をアドバイスして頂く。
講演	
立正大湊南高校サッカー部監督 南 健司先生	全国サッカー選手権大会をはじめ、全国大会で上位入賞（3 位）を果たす。部活動指導のあり方として、人間力の育成を大切にされた指導を大切にしている。指導上の工夫や選手育成に関するヒントをアドバイスして頂く。
授業研究	「保健学習の授業展開と指導のポイント」
大田市立池田小学校 養護教諭 和田寿美先生	保健学習では生徒に何を身に付けさせなければならないか。研究授業の振り返りをもとに何を授業の展開やその工夫などを解説して頂く。また、学校保健に関して保健室（養護教諭）と保健体育科教員の連携の大切さについてアドバイスを頂く。

表 9 第 3 回目学校現場研修の講義内容

学校研修及び授業実践

学校研修①	・研修校へのあいさつ ・学校、生徒の実態について・校長講話
授業視察 1 年 4 組体育 バスケットボール	・授業実践（道徳） 道徳教育の実態や教育現場における道徳教育の重要性などを考える
授業実践① 1 年 2・3 組体育 バスケットボール	・授業実践（体育） 体育分野「バスケットボール」の指導案を作成し、系統的な練習からゲームまでを展開し指導する。
授業実践② 1 年 1・4 組保健 欲求やストレスへの対処と心の健康	・授業実践（保健） 保健分野「欲求やストレスの対処と心の健康」より授業を行なう。指導案を作成し、2 クラスに分かれ授業実践・検証を通して、指導実践力を向上する。

表 10 第 2 回目学校現場研修の学校研修と授業実践内容

宿泊研修①	歩くスキー
アイスブレイク	クロスカントリースキーを通して、班内の交流を深めリーダー研修でのコミュニケーションをよりスムーズなものにする。
宿泊研修②	学校生活で起こりうる生徒間の問題をロールプレイする
リーダー研修①	学校生活を通して、集団をまとめることの難しさや、そこで起こる問題点を考え具体的に表現する。表現を通して、解決方法をディスカッションする。
宿泊研修③	学校内の集団活動に実践的な力を養う
リーダー研修②	リーダー研修①で発表された内容を前提として、班でテーマをもって創作劇を行う。どのようにしたら集団がよりまとまるかの実践的な答えを導き出す。

表 11 中学生と合同の宿泊リーダー研修の内容

3 回目の学校現場研修では、はじめて参加する 2 回生がいたことから、はじめて「学校現場を経験する」ことを主題としなければならない学生が半数近くいた。一方で、今回の 3 回目の学生や教育実習をはじめ各種実習やボランティア経験を積んだ上回生も多く参加した。はじめて参加する学生に向けた研修のねらいの反復性と続けて参加している学生に向けた発展的な連続性は、企画する段階で意識しなければならないテーマであった。しかし、上級生が経験を通して下級生を指導し、そのことが自身へのフィードバックと自覚へとつながる場面が多く見られた。

6. おわりに

本研修は、学校現場で必要な実践力を備えた教員養成の試みとして実施している。これまでの研修を通して、その内容や目的のあり方について回を重ねるごとに検討し再構成しながら実施してきた。一方で、現地の教育現場関係者の方々の

ご助言・ご提案を頂きながら、プログラムを構築することができている。教員を目指す学生にとって、より広い視野に立って教育現場を経験し、課題を発見する取り組みとしての一つとして位置づけられれば幸いである。また、今後もより具体的な視点を持って研修を企画していきたいと考える。

(みき しんご 人間社会学部スポーツ健康学科講師)